

水
溜
り

丹
羽
文
雄

講
談
社



り溜^{たま}水^{みず}

著者の了解により
検印廃止

◎ 丹羽文雄 一九六〇

昭和三十五年十月三十日 第一刷発行

三〇〇円

著者 丹^に羽^わ文^{ぶん}雄^{ゆう}

発行者 野間省一
東京都文京区音羽町三ノ一九

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
(文信社製本)

発行所

株式会社 講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振替 東京 三九三〇
電話 大塚(九四一) 大代表 三二一一

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

目次

若い嵐	七
弱い獣	五
夜を行く	九
ある退院	一四
めぐりあい	一五
水溜り	一七

水

溜

り

若

い

嵐

廊下から、大二は声^{だいに}をかけた。

「図書館へいつてくる」

茶の間の母親が答えた。

「夕飯までにはかえってくるでしようね」

「大丈夫、かえってくるよ」

うちを出ると、大二は両手をあげて、大きく伸びをした。その右手に、ノートが握られていた。四、五日間の鬱屈した気持が発散していくのは、たえようもなく快かった。大二の足取は、四、五日間机に向かっていたことをわすれてしまった。髪をみじかく額にたらした大二は、まだ童顔をうしなっていない。すこし肥り気味だが、いかにもののびのびとした体軀をもっている。バスにのりこんだが、大二は図書館のある方向とは反対にむかっていた。アイススケートの建物がみえてくるところまで来ると、大二は完全に解放感をおぼえた。足取も軽く、建物の中にはいつていく。かれは自分自身になりきっていた。机にむかっていた四、五日は、すこしも自分

自身と和解することができなかったのだ。あずけてある靴とはきかえ、リンクにあらわれると、大勢のスケーターがすべっていた。大二は、仲間の顔をさがした。

——こういうときにかぎって、たれも来ていないんだ。おれがどんなに遊ぶことにがつついていたか、たれも思ってはくれないのだ。

学校がおわって、まっすぐ家にかえらないハイティーンが、いく人も、大二の前をすいすいとすべっていく。大二の仲間も、ほとんどその例であった。一時間百円の料金は、親のすねをかじっているかれらには、決して楽な金ではなかった。それなのに、毎日のように仲間は顔をあわせている。それぞれ無理をしているのだという感慨が、ふと大二の心をかすめた。大二は、苦笑した。

——たれも来ていないのは、時間が早いせいだ。

篠田大二は、仲間のリーダー格であった。仲間といったところで、べつだん組織だっているわけではない。仲間となる資格がいるわけでもなかった。気のあった同士が、何となくあそびあるくといった程度であり、かれらのたまり場は、このスケートリンクであり、そこが一種のサロンになっていた。知っている顔というものは、不思議なもので、大勢の、一団となつてすべっているスケーターの中から器用にひろい出せるものである。ひととちがった特色をもっているわけではないのだが、平凡な顔やすがたが、自分がよく知っているというだけのこと、特殊な人間のように目にとまる。高畑ユカリが、ひとりですべっていた。大二は、ためらった。大二一の眸

は、ユカリを追った。しばらくぶりで、ユカリをみたわけである。ユカリは、以前よりいきいきとしてみえた。若鮎のようにからだの全体が、張りきっている。本人も十分それを意識してゐるらしい。ユカリは、大二の出現に気がついてゐるらしかったが、わざと知らない風をしてすべっていた。その感じが、大二にはよくわかった。何回目かで大二の前をとおりましたとき、

「ユカリ」

と、声をかけた。ユカリがふり向いた。が、そのまますべり去った。大二の目は、ユカリをもらえてはなさなかった。

「今日は」

ユカリが、大二のそばにすべりよってきた。

「ひとりか」

「そうよ」

大二が工合の悪さを感じるというのも、以前はよくユカリとあそんだものだが、徳子や園子とあそぶようになってから、ユカリに関心をもたなくなつたからである。ユカリはおとなしい性格であり、あそび相手としては面白くなかつた。徳子や園子にくらべて、ユカリは美しい顔をもっているのだが、おとなしすぎるので、自然敬遠されることになつた。ユカリは、もともと大二とあそびたがっていたのだ。しかし、大二のまわりにはユカリの知らない顔がいつもとりまいてゐた。笠間徳子と宇梶君成は知っていたのだが、ユカリは自らすすんでかれらの中にはいっていく

だけの度胸がなかった。相手から声をかけられるのを待っていた。が、大二も徳子も宇梶も、ユカリに声をかけなくなっていた。ユカリとしては、とりつくしまがなく、毎日スケートリンクにあらわれているのだが、ひとりですべていた。大二たちから声のかかるのを待っていたようである。

「どうして私に声をかけたの？」

「悪かったかね」

「いままで知らん顔をしてたくせに……？」

大二をやつつけることに、ユカリは快感を感じているようであった。大二は、あいまいに笑った。大二がすべろうと手を出すと、ユカリが断わった。が、ユカリはその場を去らなかった。一二三度たのんだ。仕方なしという風にユカリが承諾をした。ユカリと腕を組むと、大二はひとごみを縫うようにしてすべりはじめた。大二は、腫物にさわるようにユカリを慎重にあつかった。が、いく回もまわっている内に、大二は腫物の感じをうしなした。すると、ユカリが大二の腕からつるりと逃げた。大二は、追いかけた。以前のユカリは、大二にはなざれると大二を追いまわしたものだだったが、逆の状態になった。氷がなければ追いつくことは簡単だったが、スケーターでこみあっている狭いリンクの中では、逃げまわる相手をとらえるのは容易なことではなかった。とらえるよりも、逃げやすく出来ている。大二は以前と逆の立場になったと知ると、夢中になった。ようやく大二は、とらえることができた。すると、するりといなされてしまうのだった。

た。ユカリはふりかえって、笑っている。大二是にが笑いをして、また追いかける。手がとどきそうになると、その手の下を巧みに逃げてしまうのだ。そんなことをいく度もくりかえした。大二是頬を紅潮させた。以前のユカリは、大二がリードしてやらねば満足にすべれなかった。大二是ユカリをとらえて、気のすむまですべりたかった。僅か四ヶ月足らずの内に、ユカリがこれほど上達していようとは思いがけなかった。大二是、からかわれていた。大二是、むきになった。ユカリだけをみつめてすべっている、横から、とんとぶつかったものがある。あぶなく倒れそうになったのを、ふみとどまると、

「大ちゃん、見ちゃいられねえぜ」

仲間の立花が、にやにやしていた。大二是、立花の学生服に目をとめた。真新しい大学の制服だった。大二是絶望的な声をだした。

「パスしたのか」

立花が声にだして笑った。「これか」と、自分の服を顎でしめした。「服なんか、買えばいくらでも着られるよ。学校は自由大学さ」

大二是、さらに狼狽した。

「B大にも、O大にもいって見たが、篠田大二の名前は見あたらなかったね。宇梶君成の名前は、ちゃんと出ていたが、多分あいつのことだろうと思ったよ。おれは、癪にさわたったから、学生服でもと思って買ったのさ」

大二是、おどろいたままだった。

「大学なんて、どうでもよいと思ってたんだけど、実際に落ちてみると、こたえるね。影響するところが、甚大だよ」

ふかい調子で、大二是うなずいた。大二是、立花の氣持をひきたてるためにいった。

「一年間の浪人なんて、何でもないよ。つまりこの一年間を大いに遊べという意味じゃないか」
半分は自分のためであつた。

「なるほどね」

「一年間は浪人をさせてやる。しかし、来年もすべつたら、文句なしに勤めに出ろ」

といった父親のことばを、大二是思ひだした。父親の引導には、いや応なしのきびしさがこめられていた。そのときから四、五日、大二是机にかじりついていた。すべつた直後では、勉強も身につかない。四、五日も部屋にとじこもっていることに、がまんがなくなつたのだ。

「親父にはうんと油をしぼられちゃつた」

「おれのところも、そうなんだ」と、大二是答えた。「親父はひどく肚をたてた。こういう息子をもつたということを反省するどころか、みんな息子が悪いのだという風におれをやつつけるんだ。まったく立つ瀬がないよ。すべつたのは、実際おれが悪いんだけど、すべつたことでいちばん打撃をうけているのは、親父でもお袋でもない、このおれなんだからね。そういうデリカシーを、すこしは判ってくれるといいんだ」

「しかし、大ちゃんは勉強が苦手だからね」

「上の学校へいくことは、大いにあそべるということだよ。やめてしまえば、勤めに出されるからね」

大二是受験に、かすかな期待をもっていた。が、現実是非情であった。すべったことは恥ずかしい。世間体も悪い。妹弟たちにも顔向けがならない。それよりも、仲間のリーダー格としての沽券にかかわることが何よりの痛手であった。

「かの女を紹介してよ。おごるから」と、立花がユカリの方をながめていった。

ユカリは紹介されたとき、にこりともしなかった。が、立花はにこにこしていた。三人は、すべりはじめた。ユカリにひきまわされずにすむので、大二是調子をだしてすべった。

時間いっぱいすべってから、三人は喫茶店に出かけた。ジャズ喫茶店である。ケーキをたべながら、大二たちはつぎのあそび場所を話題にするのだった。ケーキをたべながらも、かれらは足を動かしている。マンボの調子にあわせて、片ときもじつとはしていないのだ。大二のからだの中には、ジャズやマンボのリズムがいつも流れているようであった。宿酔にはむかえ酒というものがある。一杯の酒で、ゆうべの酔心地が自然にひきもどされるものだが、ジャズをきいていると、血とともにながれているリズムが新鮮によみがえるようであった。

三人はユカリをはさんで、さかり場の方へあるいていった。話は、ユカリが中心である。大二も立花も、ユカリの気持を尊重した。騎士のような心づかいである。無理なことでも、女のたの

みとあれば、大ていのことは承知する。しかし、それには目的がある。それは女の方でも十分に気のついでにあることであり、その場にのぞんで、うろたえたり、わめいたりしてはならないことだった。もし女が、そんなことは考えていなかったと、とぼけてみせようものなら、

「じゃ今までの交際につかった金を返せ」

と、迫った。相手が応じない場合、学校のかえりを待ちぶせて、執拗にくださるのである。

男女あわせて七、八人が、協力する。以前につきあっていたものや、現在親しいものが入りかわり立ちかわりして責めたてる。大ていのものは、負けてしまうのだ。しかし、そのような例は極くまれであった。仲間の男女とつきあっているあいだに、かの女は仲間にとけあつてしまう。同一行動をとることに、よろこびを発見する。かれら以外に心をゆるしてつきあえる男女はいないかのように思いこんでしまう。青春の特権のようでもあつた。そこだけに青春の言訳と、自由があるように思いこんでしまうらしかつた。が、かれらはとくに青春に重きをおいているわけではなかつた。それ以外に生きようがないからにすぎない。が、一時のユカリのように脱落することはある。立花も、脱落組のひとりだったが、かれの場合は金まわりが悪くなつたため、自然仲間から遠のくようになった。ユカリの場合は、徳子や園子から、面白くない女として非難をうけるようになった。それに大二や宇梶が同調した。大二はそれほど反対ではなかつたのだが、女たちの排斥をしりぞけるほどの強力な理由はもたなかつた。女たちの同意をえなければ、仲間の空気はこわれやすかつた。何かとうるさいことが生じた。女たちの発言は、仲間では大きな力をもつ